

緋弾のアリア after  
six years (仮)

secondgate

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2015年、必死の勉強と戦いを乗り越え、遠山キンジは東京大学の大学院へと進学していた。勉学に励むかたわら、バイトと呼ぶにはあまりにも危険な仕事である公安0課の任務もこなししつつ、今も相変わらず、戦いの日々を送っている。

そんな彼にも変化があった。彼の周りの女性関係である。

# 目次

第1弾	蜂蜜色の帰還	1
第2弾	緋色との逆転関係	9
第3弾	無表情な笑顔	15
第4弾	黒雪の強襲	23
第5弾	淫乱メイドの宿願	30



# 第1弾・蜂蜜色の帰還

ある日、大学と公安0課どちらの用事も片づけ、キンジは帰路につく途中であった。

「キーくん、ひーさーしーぶーりー！」

大きな声に振り向くよりも速く、キンジの背中に衝撃が襲う。それに続いて、柔らかい感触と嗅ぎなれた蜂蜜のような甘い香りを感じた。

「り、理子！いきなり抱き着いてくるな。というか、久しぶりでもないだろう。ほんの1か月ほど会ってなかっただけだろ。」

「えー、ほんの〃じゃないよ。一か月〃も〃だよ。寂しかった〜！」

「だから離れろって！はあー、おかえり理子。里帰りはどうだったよ？」

「楽しかったよ、フランスではジャンヌとも会えたしね。そういえばジャンヌももう少ししたらこつちに来るって言ってたよ。あとねえー、お土産もいっぱい買ってきたから楽しみにしててよー！」

「それは楽しみなだ。この後、どうするんだ？」

「もちろん、キーくん家に行くつもりだよ。」

「そういうと思ったよ。わかった。行くぞ。」

「了解であります！」

キンジと理子は一緒にキンジの家に向かった。

「ただいまー！」

「はいはい、おかえり。」

「あれ？誰もいないの？」

「ああ。今日はみんな予定が入っているようだな。」

「そうなんだー、じゃあお土産渡すのは次の機会だね。あつ、そうだ！キーくん、お風呂

貸してー。」

「いきなりだな。ああ、好きにしろ。」

「じゃあ、ちよつと行ってくるね！」

キンジが寛いでいると、浴室の方から扉の音がした。どうやら理子が風呂から上がったようだ。

「ふー、いいお湯でした！」

「お、おい！なんでバスタオル一枚なんだ！」

「えー、いいじゃん。ていうか、もつとすごい姿も見たことあるでしょ？あ、えつちい気分になっちゃたのかな？」

「あのなー」

そういつて、キンジが赤面してそっぽを向く間に、理子はソファーに座るキンジの膝の上に寝転がる。理子の行動にキンジはさらに赤面するが、視線はバスタオル一枚の理子にくぎ付けだ。バスタオルに押しえつけられた大きな胸、そして今にも見えそうな秘部から目が離せない。

「くふふ、キーくんはいつまでたつてもかわいい反応するね。そういうところも好きだけどね。」

「な、なに言ってるんだ。いいから服を着ろ！」

「え、いいじゃん。久しぶりなんだし。それにキーくんの『ここ』大きくなってるよ！」

「やめろって！」

「聞こえない！」

そういつて理子は、あつという間にキンジの股間をあらわにした。言葉とは裏腹にキンジの股間は臨戦態勢だった。

「おー、キーくんのオチンポちよー元気！久しぶりだね、いい子にしてた？まあ、いい子なわけないかー。リコがいない間もいっぱい女の子泣かしてたんでしょ。悪い子だな。でもすぐにリコのこと思い出させてあげるね。まずはチューしてあげる！」

「なに人の股間に話しかけてんだ!というか、とまれ!」

「ああ、キーくんもチューしたいの?じゃあ、先にキーくんとキスしちゃおー!」

ちゅっ♡ちゅう♡んちゅうう…れるおっんちゅう♡んんうう♡っはあー!」

理子のキスにキンジは最初こそ体をこわばらせていたものの、徐々に体の力は抜けていき、最後には理子のキスに応えていた。唇が離れ、放心しているキンジをよそに理子は完全にスイッチが入ったようで、再びキンジの股間に顔を近づける。

「ではでは、改めましてキーくんのオチンポいただきまーす。あむ!れるおれろお:ちゅうっちゅうっ♡じゅぼっじゅぼ♡んんうう、キーくんのオチンポおいしー!もつと舐めちゃうね。」

そういつて理子はさらにキンジの股間を激しく攻め立てる。亀頭を丁寧舐め上げ、続いて裏筋を舐めていく。ついにはキンジの股間を口に含んで抜いていく。

「じゅぶじゅぶ♡じゅぼっじゅぼ♡」

「うっ、ああっ!り、理子!激しいって!そんなのすぐにイっちゃまう!」

「くふふ、じゃあ今度はこっちも使つてあげるね!ぐじゅつぐじゅ、ぶじゅぶじゅ。れろおれろお♡このままいかせちゃうね!」

キンジの言葉にさらに調子にのった理子は、バスタオルに覆われた胸も露わにしてパイズリフェラを始め、キンジをイカセにかかる。恍惚とした表情のキンジだったが、あ



まりの快楽から射精感に襲われ、たまらず根を上げる。

「理子、やばい！もう、イクツ！」

「いいよ、キーくん。このまま射精して♡」

どぴゅつどぴゅつ！

キンジの股間から勢いよく出た精子を理子は口で受け止めていく。

「んん♡ちゅうちゅう…ごくつ！つはあー、おいしかったー！どおキーくん、気持ち良かったでしょ！」

キンジの精子を飲み込んだ理子は満足気にそう言った。そしてキンジはというと射精後の脱力感にさいなまれていたが、いきなりバつと立ち上がると鋭い目つきで理子を睨んだ。ついでに股間も再び立ち上げていた。

「あ、あれ？キーくん？気持ち良くなかった…かな？」

「理子、よくも好き勝手してくれたな！こつからは俺のターンだ！」

「きやつ！」

キンジは理子にそう言い放ち、理子をお姫様抱っこで抱えて寝室に連れ込み、ベッドに寝かせた。さつきまで攻勢にでていた理子であったが、キンジが完全にヤル気になっている様子を見て、今度は赤面してなされるがままの状態だ。理子は攻めている時は調子に乗るが、攻められると意外に乙女な反応をする。そのことはキンジも今までの経験

から知っていた。

「理子、舐めるぞ。」

「えっ、ちよっ、キーくん、ちよっと待つ」

キンジは理子の秘部を露わにし、クンニを始める。理子は焦った声をあげるが、抵抗する力が入っていない。

「じゆる、じゆる。…少し舐めただけで、すごい濡れてきたな。というか、舐める前からけっこう濡れてたがな。」

「だっ、だつてー、キーくんの久しぶりに匂いを嗅いで、舐めてたら自然に濡れてきちゃったんだもーん（半泣き）」

それを聞いたキンジはさらに激しくクンニしていく。

「あん♡キーくん、はげしいよ♡リコ、イク！イっちゃうよ！ああ♡ん♡」

理子は激しくイキ、放心状態だ。そんな理子を見てキンジは我に返る。

「す、すまん！やり過ぎた！」

「いいよ、気持ち良かったし。…というかりコもう我慢できないや。お願い、キーくん。キーくんのオチンポ入れて！」

そういつて理子は自分の秘部をくぱあと広げて、キンジを誘う。その言葉にキンジも我慢できなくなり、理子の秘部にいきり立ったイチモツを挿入する。

「あん♡きた、キーくんのオチンポ！気持ちいいよ♡もつと、もつと♡」  
「理子、理子ー！」

理子の膣内は狭いが、キンジのイチモツを優しく包みこんでいく。愛液もさらに多く出てきて、滑りをよくしていった。キンジはその気持ち良さに一心不乱に腰を振つていく。ピストンの回数が増えるたびに、お互いの快感と気持ちが高まっていくのを感じた。

「キーくん好き、大好き！もつとリコを感じて！気持ち良くなって！あつあん、やあん♡  
んん♡くっ♡ううう♡イっちやう、イチやうよー！ね、一緒にイコ♡キーくんと一緒にイキたいよ♡」

「ああ、理子。イクぞ、一緒にっ！」

そういつてキンジが最後に激しく腰を打ち付けた瞬間、  
びゅー、びゅー、どびゅっ。

二人は一緒に絶頂を迎え、理子の膣内にキンジの精液が注ぎ込まれていく。

「ああ♡んっ♡…はあっ、はあっ、きもちよかつたね♡、キーくん！」

「ああ、つてやば！勢いあまて膣に射精しちまった！」

「えー、今更だよ。今までだって何回か中出ししてるでしょ」

「そ、それは一応、安全日とかだったし。つて、本当に、今更だな。今の関係にみんなと

なった時から責任を果たす覚悟はしたはずなのにな。」

「そうそう！それにリコ、キーくんの赤ちゃん早くほしいな。みんなと一緒にの今も楽しいけど、血のつながった家族っていうのもほしいな。大丈夫！リコけっこうお金貯めてるから一人でも育てられるし！といっても今日危険日じゃないから、デキない可能性の方が高いけど。」

「バーカー！デキたら俺も一緒に育てるに決まってるんだろ！…ただ、今はまだそれほど金貯まってるでなくてだなあ。」

「キーくん！よし、もう一回して今すぐ赤ちゃんつくろー！」

「おつ、おい、人の話きいてたか？！いますぐは…」

「お金はリコがなんとかするってばー！それに一緒に育てるって言ってくれてうれしーよ。だから、なんの問題もな〜い！それにキーくんも一回じゃ満足できないでしょ？！今度は、こっちの私（裏理子モード）でするぞ！キンジ♡」

その日は勉強もバイト（公安0課）も片づき、ゆっくりできると思っていたキンジだったが、違う意味での戦いがその後も理子と繰り広げられていった。

## 第2弾・緋色との逆転関係

ザ・プロデューサーの「ファイヤースターター」のメロディーがキンジの携帯に着信があったことを知らせる。

(・・・アリアからか)

「もしもし、俺だ。」

「でるのが遅い！まあ、いいわ。それより今すぐ会社に来なさい！すぐによ！」

キンジが返事するよりも前に電話はきれてしまう。

「はあー、相変わらずだな。仕方ない行くか。」

キンジはアリアの会社に向かった。

アリアは武偵高卒業後、しばらくはフリーの武偵として、イギリスと日本の両方で活躍していた。それから一年ほど前に、その資金力と人脈をもって新しく会社を興した。会社の規模はそこまで大きくないが優秀な人材を集めている。経営者としても現場に出る武偵としても活躍し、乗りに乗っている状態だ。キンジはアリアの会社に籍があるわけではないが、たまにアリアの手伝いに呼ばれることがあるのだ。

アリアの会社に着いてから、まっすぐにアリアのいるであろう社長室に向かった。

「おーい、アリア。来たぞー」

「待ってたわよ、キンジ。そこに座りなさい。」

着くなりアリアにそう言われ、キンジは大人しくソファーに腰掛ける。

（あれ？なんか怒ってる？俺なんかやったか？）

どこことなく怒っているようなアリアの雰囲気キンジは疑問に思いながら冷や汗をかく。

「キンジ、実はさっきまで理子が来てたの。フランスのお土産をくれにね。」

その言葉にキンジの顔は青ざめていく。

「ついでもよく聞かせてくれたわ！あんたとのあまーい一夜の話をー」

（あのおしゃべりがあああああー！）

「勘違いしないでね。別にあの娘とシタことを怒っているんじゃないわ。ていうか、そんなの今更でしょ。キンジをみんなでシエアすることはバスカービルを中心に約定が定まっているんだから。ただね、あの娘と約束したそうじゃない。赤ちゃんつくつて一緒に育てるって！」

「あ、いやー、確かにそんな話はしたけど……」

「今までスル時はゴム付けてたのに……あたしも——」

「ん？なんだって？」

「あたしも赤ちやんつくるって言うってんの！」

「えええええー！ー！」

「すぐに始めるわよ！」

「ちよ、ちよつと待つて！赤ん坊うんぬんの前にここは会社だろうが！」

「大丈夫よ！この部屋は完全防音だし、今日一日は誰も近づかないように言うてるから。」

「そういう問題じゃなくてだなー！」

「このあたしがこんだけ言うてんのよ！しなさいよ！……それとも……あたしと子づくりするの嫌なの？」

「はー、ここまで言われたら仕方ないな。俺も男だ、覚悟を決めるよ。」

「キ、キンジ！」

「アリア、するぞ。」

そういてキンジはアリアにキスをした。そして、キスをしながらアリアの服を焦らすようにゆつくりと脱がしていく。アリアの体格は緋弾の影響で出会った当時とほとんど変わっていない。つまりは、傍から見ると小学生みたいな体格に女の子にキスしながら服を脱がしている光景なのである。その背徳的な光景にキンジの興奮と嗜虐心は増

していく。

「ちゅっちゅう♡ちゅうちゅう♡キンジーはーやーくー♡」

アリアもキスで興奮しているようで甘えた声で、早く先に進むよう促していく。

「ダメだ。まずはしっかり濡らさないとな。」

しかし、キンジはそう言つて、完全に生まれたままの姿にしたアリアに愛撫していく。首筋や小さな胸を舐め、片手でアリアの秘部をいじっていく。

今まで散々、まな板だとかゴムボートだとかに例えてきたアリアの胸だが、確かに感じのその柔らかさピンとたつた乳首にキンジは魅了されていた。そして片手でいじっているアリアの秘部は指を入れるとギユウギユウに締め付けていく。今まで何度かこの腔に挿入しているが、未だにめちやくちや狭いため、入るか心配になってくる。しかし、愛液は次々とあふれ出てくるため、入るとかなり気持ちよさそうだ。

「キ、キンジー！もうだめ、もう入れてよー！キンジの入れてほしいのー！お願いー！」

我慢の限界に達したアリアはキンジに早く挿入するように懇願する。出会った当初はキンジのことを奴隷呼ばわりしていたアリアだが、セックスの最中はとても従順で、主従関係が逆転しているような状態になるのであった。そんなアリアにキンジも我慢できなくなっていく。

「ああ、アリア。入れてやるぞ。しっかり受け止めるんだ！」



「あーん！きたあ〜♡」

キンジは勢いよくアリアの膣に挿入すると、それだけでアリアは嬌声をあげ軽くいつているようだ。

じゅぶつじゅぶつ！ぶじゅぶじゅ！ぐちゅぐちゅ！

互いの性器がこすれ合うたびに卑猥な音が響いていく。

「くつ、相変わらずきついな！」

「あん♡あつあん♡キンジ！キンジのきもひー♡きもひーの！もつと深く強くついて〜♡」

「ああ、アリア！これならどうだ！」

「ああああつ、イチやう！イチやうよ〜♡」

ひと際強くついてやるとアリアはもう絶頂寸前といった様子だ。キンジもアリアのヌルヌル、ギュウギュウと締め付けてくる膣に包まれて達してしまいそうである。

「ああ、アリア！イケ！俺もイク！膣に出すぞー！」

「キンジきてー！キンジの精子、あたしの一番奥に注ぎ込んでー！」

びゅるっ、びゅるるる、びゅううー！

「はあー、はあー。あつたか〜い！これでキンジの赤ちゃんできるかな？」

「さーな。だが、このまま生でシてたらいつかはできるだろ。」

「そうね！とりあえず、これで理子にも負けないわね！」

「そんなの競うなよな！つっても、理子には一晩中、膾出ししたからな。回数でいったらお前のま……あつ！」

「な、な、な！なんですってー！それじゃあ、理子と同じ回数、いえ、それ以上の回数スルわよ！じゃないと風穴——！」

### 第3弾・無表情な笑顔

公安0課の任務を受け、キンジはある組織の壊滅のために動いていた。そして、とある山間部に組織の本拠地があることを突き止め、今夜強襲を仕掛けるところだ。その任務のためレキに支援を頼んでいる。

「キンジさん」

「レキ、来たか。準備はできているか？」

「はい、問題ありません。．．．ただ．．．」

「？ どうした？」

「いえ、任務の後で構いません。」

「そうか。じゃあ行くぞ。」

それからキンジとレキは山の中を進み、敵本拠地に向かう。

「こうして二人で山の中を進んでいると高2の時の修学旅行を思い出すな。」

「はい」

「あの時は助けられてばかりだったが、今はそれなりにやれる自信がある。危険な目にはあわせねーよ。だから安心しろ。」

「はい、私はキンジさんを信じています。」

（会った時にレキの様子がおかしかったから、任務が不安なのかと思っていたがそういう訳じゃなさそうだな。）

「見えてきたな。俺はこのまま拠点に侵入する。バックアップは任せたぞ！」

「はい。ご武運を。」

—— 2時間後 ——

「ふー、制圧完了！レキ、助かったよ。」

「いえ、ご無事で何よりです。」

それからレキと山間部を抜け、近隣の町までやってきた。深夜の山間部を進み、加えて戦闘も行ったため、二人にはそれなりに疲労の色が見られた。

「時間も時間だし、今夜はどこかに泊まっていくか？」

「はい……」

それから泊まれる場所を探したが、この町にはビジネスホテルのようなものはなく、唯一泊まれる場所として見つけたのが——

「ここ（ラブホテル）しかないか、でもなー」

「入りましょう、キンジさん！」

「お、おい、レキ？」

レキにしては強引にキンジの手を引いてラブホテルの中に入っていく。キンジも野宿は嫌なので、レキに引かれるまま入っていった。キンジはラブホテルが初めてというわけではなかったので、迷うことなく適当な部屋をとり、レキとともにその部屋に入った。

「キンジさん、先にシャワーを浴びてください。私は後でいいので。」

「そうか。じゃあ、お言葉に甘えて」

汗と疲労感で気持ち悪かったキンジはレキの言葉に甘えて先にシャワーを浴びることにした。

キンジが頭を洗い終えたころ、浴室の扉がガチャリと開く音がした。

「はー、やっぱり入ってきたか。」

キンジは若干予想していた事態に、諦めたようにそうもらした。遠山キンジの人生においてお風呂に突入するされるイベントは片手の指では足りない。その経験からレキが浴室に入ってくるかもしれないと予想していたのだ。だが、もうこれは避けられないものなんだと諦めている。

「キンジさん、入ります。」

「もう入ってるだろ。．．．どうしたんだ?」

横目でレキがタオルを巻いているのを確認し、安堵しているキンジだが、ここから状

況がどう転ぶかわからない。そのため、入ってきた理由をあくまで平静を装いつつレキに尋ねた。

「キンジさん、アリアさんと理子さんに子種を仕込みましたよね？」

「ぶーーーーー！ごほつごほつ！な、なんで知ってるんだ？」

「視てれば分かります。」

「(どんな観察眼だ！) そ、それで、ここに来た理由は？」

「私にもキンジさんの子種をください。」

(やっぱり、そういう流れか。もしかして任務前にレキの様子がおかしかったのって、この話を切り出すタイミングを見計らってたからか？・・・はー、どうするかな。)

「あんなレキ、俺は今、任務の後でそういうことをするコンディションじゃないんだが。」

「大丈夫です。私がその気にさせてみせますから。」

そういうとレキはボディソープを泡立てキンジの体を洗いだした。

(な、なんだ？いきなり！だが気持ちいい！リサがたまに背中を流してくるから知っているが他人に洗ってもらうのは気持ちがいいんだよな。だが、さっきまで子種だなんだと言っていた奴がこのまま終わるとは思えん。どうする気だ？)

「前も洗いますね。」

「お、おい！どこ触ってんだ!？」

「キンジさんの男性器ですが？」

「そういうことを言ってるんじゃない！ていうか、お前、胸を……くっ、ああっ！」

キンジの背中を洗っていたレキだったが、いきなり背中越しにキンジの股間に触れてきた。しかも、いつの間にかタオルを取っていたレキの胸が背中にムニユンと押し付けられている。慌てるキンジに対しレキはさも当然といった様子だが、キンジの股間を洗うレキの手はとても巧みにいやらしく動いてくる。それによつて疲れでそれどころではないと思われたキンジの股間も見えるうちに大きくなつていく。

「その気になつたようですね、キンジさん。」

表情の変化はわかりづらいが、レキの表情はどこか誇らしげだ。

「こんなことされたら当たり前だろ！」

レキはなおも、キンジの背中に胸を押し付けながら、キンジの股間を激しく扱いていく。泡での滑りも利用しながら、カりに指をかけるようにこすつてくる。時にはタマ揉んできて射精を促してきた。

「ぐっ、ああああっ！レキ、もう限界だ！イク！」

「ダメです！」

イキそうになるキンジだったが射精寸前でレキは手を放してしまふ。

「最初の一発目は私に飲ませてください。」

そう言うとレキはキンジを押し倒し、69の体制でキンジに覆いかぶさり股間にしゃぶりつく。

じゅぶじゅぼ、じゅぶじよぼ♡

いやらしい音を立てながら股間に吸い付いてくるレキにととう我慢ができなくなったキンジは自身の眼前でいやらしく濡れているレキの秘部を激しく舐めだした。

「キンジさん、そんなにされると・・・」

「やられてばっかでいられるか！お前もイケ！」

互いの性器を激しく舐め合っていると、二人に同時に絶頂が訪れる。

「もうイってしまいます！キンジさんも私の口でイってください！」

「ああ、イクぞ！レキ！」

びゅっびゅっびゅうううー！

迸る精液をレキは口で受け止め、キンジもレキの潮を顔に浴びる。

「ごくん！キンジさんの精液が私の中に入っていくのを感じます。次はいよいよこちらに注いでください。」

レキはキンジの精液を飲み込み、嬉しそうな様子だ。それからレキは浴室の壁に背中を預け自分の秘所が見えるように片足を上げ、キンジを誘惑する。射精したばかりキンジだったが、その様子を見てキンジの股間はすぐに復活する。



「ああ、挿入するぞ！レキ！」

「あんっ！キンジさん！ちゅっちゅう♡んっ♡」

挿入すると普段のレキからは想像もつかない喘ぎ声が漏れる。そして濃厚なキスを交わしながら、お互いの腰を打ち付け合う。

ぐちゅぐちゅといやらしい音が浴室に響き渡り、それによって二人はさらに高揚していく。

「キンジさん、気持ちいいです！キンジさんはどうですか？私で気持ち良くなってくださいますか？」

「ああ、気持ちいいぞ！最高だ！」

「嬉しいです！もつと気持ち良くなってください、キンジさん！」

レキの膣内はキンジを射精させようと、まるでそれ自体に意志があるようにうねり、キンジのイチモツを扱っていく。気を抜くとすぐに射精しそうになるのをぐつと堪え、レキをイカせようとキンジもスパートをかける。

「レキ、そろそろイクぞ。中で出してやるからしつかり受け止めるんだ！」

「はい！私の子宮にキンジさんの子種を注いでください！キンジさんの赤ちゃんを孕ませてください！」

びゅっ！びゅっ！びゆるるるうううっ！

「んあつ、来ました！キンジさんの精子！あああくん！……はあはあつ！感じます、私の子宮にキンジさんを。」

レキは中出しされて、うっとりとしながら自分の下腹部を撫でていた。

「はー、はー！満足したか？」

「いいえ、まだまだです！もつとたくさんシて、妊娠の確率を高めていきましよう。取り敢えず、続きは上がってからベッドで……行きましよう、キンジさん！」

無表情にそう言うレキの顔はキンジには笑っているように見えた。

（そんな顔で言われたら断るなんてできないな。）

キンジは覚悟を決めるとともに、自身の過労死を覚悟した。

続くかも

## 第4弾・黒雪の強襲

ある夜、遠山キンジは夢を見た。

「キーくん！リコがキーくんのオチンポ舐めてあげるね！」

「ちよつと理子！キンジのはあたしのなんだから勝手なことしないでよね！」

「いえキンジさんの男性器はアリアさんのものではありません。それにキンジさんを一番気持ち良くできるのは私です！」

「レキュはエツチの時はよくしゃべりますな。じゃあ、みんなで一斉にして誰がキーくんを気持ちよくできるか比べよう！」

「ふんっ、分かったわよ！」

「はい、負けません！」

「ではでは、せーの！」

「「あ〜ん」」

バサッ！



「お願い、キンちゃん！私にも私にも臆出しして——！」

「お、おい、わかった、わかったから静かにしろ！近所迷惑だろ！……というかお前だけ除け者にするわけないだろ。大事な幼馴染であり、はとこでもあるお前をな。」

（取り敢えず白雪を落ち着けないと！このままバーサーカー状態の黒雪さんの相手なんかできん！）

「キンちゃん……でも、さつきキンちゃん様のキンちゃん様を舐める時、寝言でみんなの名前は呼んでたけど、私はいないみたいだったよ！」

「げっ、そっ、それはだなー。えーと……」

「やっぱり臆出しされた娘はキンちゃんの中で存在が大きくなってるんだ！私も早く、臆出ししてもらわないと！一刻も早く!!」

（あつ、こりやダメだわ。）

「キンちゃんは動かなくていいからね！私がたくさん気持ち良くしてあげる。だからいっぱい射精して！入れるよ！」

「待って、白雪！前戯もなしに！」

「大丈夫だよ！キンちゃんのさつき舐めてから大きいままだし、私も舐めてたらもうこんなに濡れちゃってるしね！じゃあ、いくね！……んっ、あつ、あああああ  
んんんんん——！！」

白雪は下着をずらし、びしょびしょに濡れている自分の秘所をキンジに見せつける。それから一気にキンジのイチモツを挿入した。白雪は寝そべっているキンジに跨り、一心不乱に腰を振ってキンジの精子を搾り取ろうとする。

「ぐうあああ！白雪、激しすぎだ！もう少しゆっくり——」

「あはは、キンちゃんとっても気持ちいいよ♡キンちゃんも気持ちいいよね？私が一番気持ちいいよね？だって、ほら！キンちゃんのオチンチンと私のオマンコこんなにピッタリだよ♡キンちゃんのオチンチンからも気持ちいいっていうのがすごく伝わってくるよ！やっぱり私たち相性ピッタリなんだね！」

（ダメだ。全然人の話を聞いていない。・・・だが、白雪の言う通り俺たちの体の相性がいいのは本当だ。しかも、その相性は異様にいい。白雪の膣は俺専用だと言わんばかりにピッタリだ。遺伝子レベルでの結びつきを感じる。これでもう少し性格がまともだったらな。）

「あんっあん、んっううう♡キンちゃん好き♡愛してるよ♡キンちゃんの赤ちゃん早くほしいの！だから、出して！出して！いっぱい射精して——♡!!!」

「ああ、もう無理だ！出るっ！」

びゅっ、びゅるうううううううう——！

「ああああああああんんっっ！キンちゃんの精子きた——♡……はあはあっ、

あつたかあーい♡」

キンジの射精を子宮で受け止めた白雪は息を荒げながらキンジの胸に倒れこむ。キンジの精子をもらえて、とても幸せそうな様子だ。

「白雪、少しは落ち着いたか？」

「あ、キンちゃん！ごめんなさい、私つたらなんてはしたない真似をー！」

白雪はキンジの言葉で我に返り、さつきまでの自身の行動を恥じらいだした。先ほどまで人の話も聞かずにキンジの上で一心不乱に腰を振って乱れていた人物と本当に同一人物か疑いたくなるような豹変ぶりである。

「もういいさ。色々とビビったがな。……白雪、最初に言つたようにお前のことも大切に思っているし、除け者にもしない。俺の子供産んでくれるか？」

「き、キンちゃん！もちろんです！キンちゃんとの子供なら何人でも！——よし、そうとなつたらもう一度しましょう！」

これにて一件落着かと思われたが、そうはいかない。白雪は付けていた下着を脱ぎ捨て、継戦の意志を示す。

「すぐにまた大きくしてあげるからね！」

止める間もなく、白雪は露わになつたその胸をキンジに押し付ける。そしてキンジの乳首を舐めながら、片手でキンジの股間を扱きだした。

射精直後で萎えていたキンジの股間も白雪による刺激で強制的に勃起させられる。

ぐちゅぐちゅ、ぐちゅぐちゅ！

「あは、勃ったよ、キンちゃん♡じゃあ、もう一回入れすね♡」

「待って、射精直後でまだ敏感…ぐうつ！」

「また一つになったね、キンちゃん♡」

白雪は静止も聞かず再び挿入し、腰をいやらしく振り始める。さつきとは違い腰を振るたびに、解放された胸がキンジの目の前でプルンプルンとすごい勢いで揺れている。その光景にキンジも興奮を憶える。

「キンちゃん？あつ、抜いちや、きやつ！」

キンジは体を起こすと、自身のイチモツを白雪から引き抜き、自分の上に跨っている白雪を四つん這いの姿勢にさせる。この体制の白雪は大きな臀部が丸見えで、かつその大きな胸が下に垂れ下がり、かなり卑猥な光景だ。

「好き勝手やった白雪には少しお仕置きが必要だな！バックから突いてやる！ついでにその胸もいじってやるよ！」

キンジは白雪を落ち着けるのを諦め、イカせ倒して鎮める方針にチェンジする。四つん這いにした白雪に後ろから覆いかぶさり、その垂れた胸を弄びながらバックから思いつ切りついていく。



「ひいやああくん！キンちゃんのオチンチン来た〜♡それにおっぱいまで〜♡こんな意識とんじやうよ〜♡」

「ああ、いつでもイっていいぞ！」

「ああああああんっ！もうダメ〜♡」

「・・・はあ、はあ、キンちゃん気持ちよかったよ♡じゃあ、もう一回戦お願いします！」

白雪の夜の体力は凄まじく、キンジは自分の方針が無謀だったことを実感する。日が昇るまでの間中、キンジは白雪に搾り取られるのだった。

続くかも

## 第5弾. 淫乱メイドの宿願

最近のキンジは理子に臆出ししてしまったのを皮切りに、バスカービルの女子たちから子作りセックスをせがまれるようになった。大学の課題や公安0課からの任務だけでも日々の精神力と体力をすり減らしているというのに、日夜4人からかわるがわる子作りを求められるのは本当に倒れてしまいそうだ。

避妊していたころは、もう少し節度をもって行為に及んでいた気がするが、今は誰が一番にキンジとの子供を授かるか競っているように感じる。

(この状況をなんとかしないとなく、さらに増えそうな気もするし……)

キンジが今の生活をなんとか続けられている要因は二つあった。

一つ目は、数年前にキンジの実家で見つけた秘伝書。そこには新たなヒステリアモードへの至り方が記されていた。詳しいなり方は省くが効果としては、戦闘力の向上が見られない代わりに精力を大幅に増大させるというものだ。それだけでは当時のキンジにとつてそこまで魅力的なものではなかったが、このヒステリアモードにはもう一つ別にキンジにとつて魅力的な点があった。それは、素の自分のままで女性と行為に至れる点だった。歴代の遠山家の人間の中にもヒステリアモード時の自分と素の自分との

ギャップに悩んだり、素の自分のまま好きな相手と愛し合いたいと考えた人間がいたんじゃないかと秘伝書を読んだキンジは思った。

このヒステリアモードのおかげで、キンジは体力お化けのバスカービルの女子たちとも渡り合えているし、セックスの最中口走ってしまったキザツタらしい台詞に後で身もだえせずに済んでもいる。

そして、二つ目は私生活のあらゆる面でキンジをサポートしてくれているメイドの存在だった。

ガチャッ

「ただいま。」

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

そう言うって笑顔でキンジを迎えたのはキンジの専属メイドであるリサ・アヴェ・デュ・アंकだ。彼女は現在、キンジの身の周りの世話をするかたわら家事代行サービス会社で講師の仕事をしている。

キンジが忙しい日々を送る中で何とかやっていけているのは、このリサが食事の支度から掃除・洗濯、金銭の管理までお世話してくれているからだ。もはや、キンジの生活はリサなしでは成り立たなくなっていた。

「本日もお疲れ様でした。お食事の用意ができております。本日もリサがご主人様のた

めに腕によりをかけてつくりましたから、きつと気に入っていただけだと思いますよ。」  
「ああ、うまそうだな！ありがとう。」

それからキンジはリサのつくった食事に舌鼓を打つ。

「相変わらずリサの料理は絶品だな！だが、なんだか今日は……変わった食材が多くないか？」

食卓には普段あまり食べることのない牡蠣や鰻、スッポンなどの料理が並んでいる。

「はい！今日は珍しい食材がたくさん手に入りましたので……それに最近のご主人様は奥様方との夜の営みでお疲れのようでしたので精の付くものをお願いします。」

「ウツ?!ゴホツゴホツ！な、なに言ってる……」

「あ、違いますよ。リサは別にそのことを咎めているわけではありません。逆にリサは嬉しいのです！ご主人様はここ数年で多くの女性と関係を持つようになりました。それだけでもリサにとって大変幸せなことでしたが、ご主人様はしっかりと避妊をされていたので、ご主人様の御子を授かるというアヴェ・デュ・アंक家の女としての宿願は未だに叶えられずにあります。ですが、最近のご主人様は奥様方との子作りに日夜励んでいらつしやる様子！これでやっとリサにもご主人様の御子を授かるチャンスが来たのだと思い、リサは嬉しくなりましたのです！」

リサは笑顔でそう答える。その目はキンジと子作りができるという期待感に満ち満ちていた。これでもし断ろうものなら、泣かせてしまいそうである。

リサとエツチな行為に及んだ回数はかなりのもので、バスカービルの女子たちを凌ぐのではないかというほどしている。しかし、胸や口に出すばかりで、セックスの際は必ずゴムを付けるので膣出ししてやったことはない。リサは出会った当初からキンジとの子供を授かりたいと言っていたのに、キンジはその宿願を叶えてやらずに身の周りの世話をさせていたことに今更ながらに罪悪感を持ち始めた。

「そうだな・・・リサ、今まで俺によく仕えてくれた！今夜その想いに応えてやる、覚悟しておけよ！」

「ご主人様…はい、リサも今夜はいっぱい頑張りますね！」

キンジは意を決したようにリサにそう宣言する。リサもその言葉に大きな感動と期待を持って返事をした。

食事と風呂を済ませたキンジは現在、寝室でリサを待っている状態だ。今まではどちらかというと女性の方から襲われて行為に及び、流れで子作りセックスになることが多かった。だが今は、自分から子作りするためには女を待っている状態だ。そう考えると、不思議な背徳感と高揚感がキンジを満たしていく。

ガチャ

「お待たせしました、ご主人様！」

寢室の扉をそつと開け、リサが入ってきた。

寢室に入ってきたリサは、中身が見えそうなくらい生地の薄い白いネグリジエを着ており、下半身からは白いレースの下着とキャットガーターをのぞかせていた。その妖艶な姿にキンジは自身の興奮がさらに高まり、鼓動が早くなつていくのを感じた。

「相変わらず、すごい格好だな。」

「ご主人様がお好きなのなので……まあ、モイイです！ご主人様のもうそんなに大きく！リサで興奮してくれましたね！」

キンジの視線を体に浴び、リサは頬を紅潮させて恥じらいつつもキンジが興奮している様子に嬉しそうにしている。そしてベッドに腰掛けるキンジの股間が大きく怒張しているのに気が付くと、幸せいっぱいといった様子で熱い視線をキンジの股間に注いでくる。

「あ、ああ……その、確かにリサの姿を見て大きくなっているんだが、今の段階でここまで大きくなるのは……食事の後からなんだか体もほてっているし、リサなにか食事にくわえて……んっ!!」

「んあ、ちゅっ！ちゅううっ、ちゅう♡ぱあ……ご主人様、リサはもう我慢できま

せん！お情けを！リサにお情けをください！」

キンジは痛いくらい怒張している自身の股間に違和感を抱き、先ほどの食事が原因ではないかとリサに問おうとしたが、途中でリサにキスで口を塞がれて止められてしまった。リサは完全に発情した様子でキンジの唇を貪り、そしてその先の行為を待ちきれないとはかりにせがんでくる。片手はパンツ越しにキンジの股間を優しく撫でてキンジを誘惑していた。気のせいかその瞳はハート模様になっっているようにすら見える。

「待て、リサ！慌てるな！ちゃんとしてやるから……ただ、勃起しすぎて股間が痛いんだ。先に一発、出させてくれるか？」

「はい、ご主人様！ではまず下着を脱がしますね——モイー！下着越しでも大きくなってるのは分かりましたが、実際に見るとさらに大きく見えますね！ご主人様のペニスとっても遅しくてステキです！でも大きくなりすぎて辛そうです。すぐにリサが楽にして差し上げますね！……ちゅっ♡」

キンジからの要望を受け、リサはキンジの下着をズリ下ろし股間を露わにする。キンジの雄々しく怒張した肉棒を根元から亀頭まで舐めるように見つめたりリサはキンジの股間を絶賛する。そして、両手を使ってキンジの肉棒の根本をつかみながら、亀頭の先端にキスをした。

「ちゅ、ちゅうつ、ちゅっ！たくさん気持ち良くなってください、ご主人様♡」

リサは愛おしそうに亀頭にキスを重ねていく。リサの美しい唇が肉棒に振れるたびにキンジは背徳感と興奮を感じた。

「ちゅ、ちゅううっ……んちゅう、ちゅるるううう」

リサはキスを続けつつ、少しずつ唇を押し付ける時間を長くしながら刺激を強めていく。その痴態を見せつけることで、キンジの興奮を煽っているようであった。

「くっ……リサ、そろそろ啜えてくれないか！」

キンジがたまらなくなつてそう言うと、リサは嬉しそうにほほ笑む。

「はい、仰せのままに。はむうっ！……んちゅうちゅる、ちゅっ！……れろ、れろっ！……じゅぼ、じゅぼ！」

リサはキンジの言葉に待つていたと言わんばかりに大きく口を開けると、そのままキンジの肉棒を啜え込んでいった。先端から竿の途中までを一気に口へ入れると、そのまま肉棒を優しく包み込み、舌を使いながら舐め上げていく。亀頭を覆うように舐めたり、裏筋に沿うように上下に舐めたりと巧みなフェラで刺激を与えていく。

「うおっ、これは気持ちいいなっ！」

キンジが思わずそうこぼすと、リサはいったんフェラを止めてキンジを見上げてきた。もう何度もお口でご奉仕していますから！……ご主人様の気持ちいいところは全部分かり



ます！今度は胸も使ってもっと気持ち良くしますね♡」

そう言うとりサは白いネグリジエを脱ぎ、その豊満な胸を露わにした。そしてキンジの肉棒を自分の胸で挟みこむと、再び肉棒を啜え込んだ。

「ぐああー！」

先ほどとは違う刺激に包まれ、キンジは身もだえする。リサの乳房はキンジの肉棒を挟み込んでむにゆりと変形しており、その感触はもはや天国にいるようだ。加えて、硬くなった乳首がパイズリをするたびにキンジの太ももから下腹部にかけて擦れてきており、その感触が堪らない。なにより、先ほどより強く龟头部分をフェラしてくる刺激にキンジは今にも射精してしまいそうになる。

「ご主人様、我慢なさらず好きな時に吐き出してください♡……はむっ、じゆる、じゆるるるる！じゅぼじよぼ！じゅぶじゅぶ♡」

「リサ、もうダメだ！出すぞ！受け止めろっ！」

びゆるるるるうううー！

キンジは一瞬、目の前が真っ白になるほどの快感に襲われ、それから勢いよくリサの口内に射精した。

「んううっ……あむ♡じゆる♡あむ……んぐ、ぐくっ！ふああ……」

リサはキンジの射精を口で受けとめ、おいしそうに味わうと精液を飲み込んだ。そし

て、その余韻に浸るように恍惚とした表情を浮かべている。

「ありがとう、リサ。とても気持ち良かった。」

「は、はい！気持ち良くなっていただけでリサは嬉しいです。」

キンジの言葉に我に返ったリサは慌てて返事をする。だがその表情はもう完全にエッチなスイッチが入っている顔だった。

「ご主人様、リサはもう、本当に我慢できなくて・・・お願いします！挿入してください！」

リサはびしょびしょに濡れた白い下着を見せつけながらキンジにそう懇願する。

「ああ、わかった！」

キンジはそう言う通りリサの下着を脱がせていく。リサの秘部からは次々に愛液が溢れており、下着にも透明な糸が引いていた。その光景にキンジの興奮は再び高まり、股間が怒張していく。

「モ〜イ！ステキです、ご主人様！さあ、リサを使って気持ち良くなって、リサを孕ませてください♡・・・♡んっ、ああああん♡」

リサの言葉に理性が切れたキンジは一気にリサの膣に肉棒を挿入する。リサは挿入しただけで軽くイッたようで、体を震わせながら大きな喘ぎ声を漏らした。キンジもあまりの気持ち良さにいきなり射精しそうになるのを必死に我慢し腰を動かしていく。

「あんん♡ひゃんっんっ、あつあああん♡ご主人様がリサの中をかきまわしています！気持ちいい、気持ちいいですううう！もつと滅茶苦茶にしてください♡」

「ああ、ご主人様として期待には応えてやらないとな！」

「あううっ！」

キンジはリサの体を抱きしめ、思いつ切り腰を打ち付けていく。リサの体は柔らかく、その抱き心地は最高という言葉以外ない。キンジは全身でリサの体を味わいながらピストンし続ける。キンジの怒張した肉棒で突かれるたびにリサの膣からはとめどなく愛液が溢れていた。そして膣内が蠢き、ヒダの一つ一つで肉棒に絡んで射精を促していく。

「いつもより感じてるな、リサ」

「は、はい！もうすぐ、ご主人様に膣出ししていただけると思うだけでリサはもう興奮が抑えられません！ご主人様、子種を注いでください！」

「本当にリサはエッチなメイドだな！焦らなくても、すぐに出してやるさー！」

そう言つてキンジはラストスパートをかけていく。

「ひゃうっ！あつ、やあん♡♡…ごしゅじんしゃま♡もう、りしやはイってしまいました♡…んっ、んああああああ！」

リサはもう呂律も回っておらず、普段の完璧に仕事をこなす姿からは想像もつかない

ほどに淫らに喘いでいる。そんなリサの姿にとうとうキンジも限界を迎えた。

「リサ！出すぞ！しつかりと受け止めるよ」

びゅっ、びゅっ、びゆるうううううううー!!!

「あうっ、ひゃんっ！イっ、イクううううううううっ」

リサはキンジの精液を子宮で受け止めると同時に、全身をガクガク震わせながらひと際大きな絶頂を迎えた。さらに絶頂により力んだためか、普段は出ていないジエボードの獣としての耳と尻尾が出てしまっている。

「はあ、はあ、はあ！お腹あつたかいです・・・ご主人様、ありがとうございます。ご主人様の子種をいただけで、リサは幸せです！」

「ああ、リサが嬉しそうで俺も嬉しいよ。あと、耳と尻尾出てるぞ」

「ご主人様！・・・あ、きれいにしますね！・・・れろ、れろっ♡じゅぶじよぼ♡ふああ、きれいになりました！」

リサはキンジの言葉に感動したようだったが、すぐにメイドとしての使命を思い出したように精液と愛液で汚れたキンジの肉棒をお掃除フェラし始める。

しかし、リサの料理で精力がみなぎっていたキンジはその刺激によつて再び股間が元気になってきていた。

「まあ、ご主人様つたら！・・・どうぞ、またリサをお使ください♡♡」

キンジの大きくなつた股間に気づいたリサは、嬉しそうに顔を紅潮させる。そして、四つん這いになつて秘所を見せつけながらキンジを誘惑するのだつた。その際に尻尾がふらふらと揺れる様にキンジは言い知れぬ興奮を覚え、股間を完全に勃起させた。「臆出しされてすぐに主人をそんな風に誘惑するなんてリサはいけないメイドだな。これはお仕置きが必要だ！」

「はい、えつちなメイドにお仕置きしてください！ご主人様♡」  
主人とメイドの夜は長い・・・・・・・・・・続くかも・・・・・・・・・・